

# 玉 語

## 注 意

1. 問題は全部で 26 ページである。
2. 解答用紙は(その 1)(その 2)がある。(その 1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

### マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/> 2	<input type="radio"/> 3	<input type="radio"/> 4	<input type="radio"/> 5	<input type="radio"/> 6	<input type="radio"/> 7	<input type="radio"/> 8	<input type="radio"/> 9	<input type="radio"/> 0
---	----------------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

— 次の文章は、『童謡の百年』という本の序章の一部である。これを読んで後の間に答えよ。

本書は、今日私たちが「童謡」という言葉でとらえている一群の歌について、そのイメージがどのような経緯<sup>1</sup>で形成されてきたのかを追跡的に探ろうとするものです。私たちの多くは、童謡を「日本人の心のふるさと」であり、また同時に「今まさに失われつつあるもの」であり「次世代に継承すべき文化財」であると考えています。しかし童謡は、いつの時代にも常に今日と同じようなものとして存在していたわけではありません。大正中期に近代的な童謡が成立してから今日までの約百年間に限っても、童謡という言葉に込められた理念や、またその名によって指示される楽曲の具体的内容は、時代の推移のなかで大きく変化しているのです。そこで本書では、過去の記録を掘り起こすことで童謡なるものが折々の社会でどのように受け止められ、語られ、あるいは消費されてきたのかを確認し、またそうした作業を通じて今日に至るまでの童謡イメージ<sup>2</sup>の変<sup>2</sup>過程を明らかにしたいと思います。

そんなことをして、いったい何になるのだ、という声が出てくるかもしれません。過去がどうであれ「今は今」なのだ、と。もちろん私もこの本のなかで「現代の童謡イメージは間違っている」などと主張したいわけではありません。現代を生きる私たちが、現代の流儀で童謡なるものを理解し受容し消費することは、それ自体としてはごく自然なことです。しかしそれでも私は、過去を振り返りつつこれまでの童謡観を分析することには大きな意味があると考えます。

第一に、童謡に対する人々の認識がどのようなものであったのかを記録に留めることは、今日に連なる音楽文化の一側面を歴史的資料として未来に残すという意味で価値のある試みだと言えます。長い時間のなかで少しずつ形を変えてきた人々の「もの」の見方・考え方は、しかしそれぞれの時代においては<sup>3</sup>ごく常識的なものであった（あるいは今まさにそうである）がゆえに、わざわざ意識化される機会が少なく、放っておくとすぐに<sup>3</sup>風化<sup>3</sup>してしまいがちです。そんな各時代の「当たり前」を、歴史の流れに完全に埋もれてしまう前に収集・整理しておくことは、誰かが取り組むべき大切な仕事だと言えます。

また第二に、そうした資料化の取り組みを通じて私たちは、社会的に重要な「気付き」を得ることがができます。それは、世の

中のさまざまな事象に対する私たちの認識が、実は今という時代の枠組みのなかでのみ通用する限定的なものでしかない、というポイントです。童謡に限らず、私たちはついつい自分たちの常識がいつの時代にも、また誰にでも通用する真理か何かのように思い込んでしまいがちです。しかし現代の常識とうまく整合しない過去の状況に目を向けることで、私たちは自らの常識が決して普遍的・不変的なものではないことを再認識できるのです。

そうした、自らの常識のもろさや不完全さに対する「気付き」は、自分自身やその社会を **A** 化する視点の獲得につながります。何気なく信じていた自分たちの **B** 性が、過去との対比のなかで崩れていくのです。もちろんなかには、進歩史的な立場から **C** 人々もいるでしょう。彼らは、自分たちの常識と相容れない過去の童謡観を、なにやらの外れなもの、原始的で愚かしいものとして嘲笑するのかもしれませんが、しかしよく考えてみれば、私たちが今この時代に共有している常識も、将来的に変化しないという保証はどこにもないのです。これまで変化してきたものが、今後は一切変わらないなどと、なぜ断言できるでしょう。ひよつとすると私たちは、現在の立場から過去を笑うのとまったく同じやり方で、未来の人たちから「あの頃の人たちは馬鹿なことを考えていたんだな」と笑われてしまうのかもしれませんが、ならば、今を特別視することなく過去と現在との相違を俯瞰的・客観的に見つめる視座を得ることは、私たちの社会をより深く考えていく上で非常に重要なことだと言えないでしょうか。

本書は以上のような問題意識に立ちながら童謡という森に踏み込んでいくわけですが、その際、具体的にどのような学問的スタンスに立って問題に取り組んでいくのかについても、ごく簡潔に述べておきたいと思えます。

本書は「時代や状況が変わっても童謡の本質は不変である」という考え方を否定する立場を取ります。「時代や状況」というのは、つまり人々が生きている社会に他なりません。そんな社会の変動から隔絶されたところに、自律的・絶対的な「童謡」なるものが存在しているわけではないのです。私たちが「童謡」と呼んでいるものの内実は、さまざまな主義主張や利害関係を持った関係者ら（作る人も、うたう人も、聴く人もそうです）が互いに衝突したり交渉したり協力したりするなかで、その都度形成され、あるいは変形されてきたものです。その意味で「童謡」は（またそれに限らずあらゆる音楽は）<sup>4</sup> 社会の中に埋め込まれている、と

言つてよいでしょう。本書が「童謡」と呼ばれている作品そのものを問題にするのではなく(もちろんそこにも目配りはしますがそれ以上に)当の作品が社会のなかでどう位置づけられ、語られ、消費されているのかに大きな注意を払う理由はここにあります。

実を言いますと、この「音楽を取り巻く社会の側に照準を当てる」戦略は、童謡に限らず近年の音楽研究における一種のトレンドです。人文科学のなかには「音楽学」という領域があるのですが、そこでは長らく、個々の音楽作品が自律的なものとして扱われる傾向がありました。しかし近年、そうした姿勢は次第に批判されるようになってきています。あらゆる音楽は、その本質をあらかじめ作品の内部に備えているのではなく、それが置かれたコンテキスト(文脈)のなかで、その都度意味を見出される、という考え方が主流になってきたのです。本書もそうした音楽研究の今日的潮流を下敷きにしています。つまり本書を通じて私たちが考えていくのは、「童謡<sup>5</sup>とは何か」ではなく、むしろ、過去や現在の社会において「何が童謡だと考えられていた(いる)のか」という問題です。

もう一点、本書では特に過去の事象について議論する際、その材料として書籍・雑誌・新聞などの文章や録音物を中心に扱います。反面、当事者や関係者へのインタビューなどは、今回の本のなかに積極的に盛り込んでいません。

敢えてそのような方針を取ったことには、もちろん理由があります。あくまでも一般論ですが、過去の事柄に関しインタビューを通じて得られる「語り」は、発話者や聞き手がどれほど注意しても、それが語られる今の常識について引つ張られてしまいがちです。また、「語り」の内容は、それが発話者にとって重要な(思い入れのある、情熱を持って取り組んできた)事柄であればあるほど、意図せず美化されてしまう傾向にあるように思われます。もちろん、そうした無意識のバイアスを取り除きつつ「語り」の核を見極めるような技法はあるのでしようし、私自身、今後の課題としてそのような研究にも取り組んでいきたいと考えています。しかし本書では時期<sup>6</sup> ショウソウと判断し、敢えてそれを見送りました。代わりに本書では、各時代の空気のかなかで折々の常識に従つて書かれ、そして今日までひっそりと残されてきた資料たちに、<sup>7</sup> 往時の状況を存分に語つてもらおうと考えています。

問一 傍線部1「経緯」とはどのような意味か。最適なもの次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **1**。

- ① 考え、意図
- ② ことのおこり、原因
- ③ いきさつ、事情
- ④ もくろみ、計算
- ⑤ やり方、方法

問二 傍線部2「変セン」の「セン」を漢字に直すと、どの字になるか。次の①～⑤から、その字を含む言葉を一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **2**。

- ① 激セン
- ② 直セン
- ③ セン水
- ④ セン扱
- ⑤ セン都

問三 傍線部3「風化してしまいがちです」とはどのような意味か。最適なもの次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **3**。

- ① あとかたもなく消え去ってしまやすい
- ② たちの悪いものに変わってしまやすい
- ③ はつきりわからなくなってしまうやすい
- ④ 全く異なったものに化けてしまやすい
- ⑤ 病んで弱いものになってしまやすい

問四 空欄

A

B

に入る言葉の組み合わせとして、最適なものをつぎの①～⑤から選び、記号をマークせよ。

解答欄番号は 4。

- ① A | 相対      B | 絶対
- ② A | 否定      B | 肯定
- ③ A | 異端      B | 正統
- ④ A | 劣悪      B | 優秀
- ⑤ A | 異質      B | 同一

問五 空欄

C

に入る文として、最適なものをつぎの①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 5。

- ① 過去と現在の同一性を堅く信じている
- ② 過去に対する現在の優位を信じて疑わない
- ③ 伝統的な常識の存在を認めようとする
- ④ これまで変化してきたことは今後も変化すると思っている
- ⑤ 自分たちの常識は限定的なものではないと考える

問六 傍線部4「社会の中に埋め込まれている」とはどういう意味か。最適なものをつぎの①～⑤から選び、記号をマークせよ。解

答欄番号は 6。

- ① 幼い頃に歌った童謡の記憶は、人々のなかに残され、容易には消えない
- ② 時間がたつと、童謡の価値は社会の中に埋もれてしまい、見えにくくなる
- ③ 一つ一つの童謡のすばらしさは、変動する社会のなかに埋もれても変わらない
- ④ 童謡を愛する人々は、時代が変わっても社会のなかに根を張り、生き続けていく
- ⑤ 童謡の理念や内容は、その時代の社会の文脈の中でとらえられるものである

問七 傍線部5「童謡とは何か」ではなく」とあるが、この文の作者は、なぜ「童謡とは何か」という問題設定を選ばないのか。最適なもの<sup>7</sup>を次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7。

- ① 童謡の内実は、さまざまな主義主張や利害関係によって本来の姿を失ってきたから
- ② 童謡の本質を追究するためには、まずその変化について考える必要があるから
- ③ 童謡に限らず、近年の音楽研究のトレンドから外れるべきではないから
- ④ 童謡という概念そのものが、時代の移り変わりの中で変化してきたから
- ⑤ 童謡の作者は、まず「童謡とは何か」を考えて作ったわけではないから

問八 傍線部6「ショウソウ」を漢字に直せ。解答用紙(その2)を使用。

問九 傍線部7「往時」とは、ここではどういう意味か。最適なもの<sup>8</sup>を次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8。

- ① その資料の背後にはてしなく広がる激動の日々
- ② その資料が現在まで伝えられた時間の流れ
- ③ その資料から見通せる、さらに遠い過去
- ④ その資料が実際に作られ、息づいていた時期
- ⑤ その資料が生まれた時期へとさかのぼる心の動き

問十 この文章の内容に合っているものを、次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 9。

- ① 過去の童謡には、それを生み出した時代の文脈があるので、現代人の流儀で鑑賞するのは正しい態度とは言えない。
- ② 童謡というもののイメージがどう変わってきたかを考えることは、現代社会を深く考えるために役に立つはずである。
- ③ 埋もれてしまいがちな童謡の本質を未来に伝えていくためには、まず資料を収集・整理しておく必要がある。
- ④ 現代の私たちが未来の人たちから笑われないようにするためには、童謡だけではなく、音楽全般を学問的に研究すべきである。

⑤ 童謡について、今の常識にとらわれずに考えるためには、過去に童謡に関わってきた人々の生の声を聞かねばならな  
い。



二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

プラトンの「高貴な嘘」論以来、政治に「嘘」が付きものであるという問題は、延々と論じられてきた。近年、何かと注目されることの多いアーレントであるが、彼女の「政治における嘘」論もまた、今日の政治問題と妙にフゴウするところがある。

まずアーレントは、政治は伝統的に「嘘」と密接にむすびついてきたことを認めて、「誠実が政治的な徳と見なされたためはないが、嘘はつねづね政治的な駆け引きにおいて正当化できる道具とみなされてきた」と述べている。それゆえ、アーレントは「政治における嘘」がそれ自体で **A** であるとは考えない。政治には一定の「嘘」や「機密」が付きものであり、完全にクリーンで「誠実」な政治などというものはありえない、という見解をとっている。

ただし、アーレントが警鐘を **B** のは、現代的な「政治における嘘」には伝統的な「政治における嘘」にはなかった危険な側面がある、という点である。すなわち、「伝統的な嘘と現代的な嘘との違いは、隠蔽することと破壊することの違いにほば等しい」。どういうことか。伝統的な嘘は、為政者が真実を隠蔽するというかたちで行われるものであって、その嘘は「敵に向けており、敵のみを欺こうと意図していた」。それに対して、現代的な嘘の特徴は、それが敵に向けられるのではなくて、自国民および自分自身に向けられるという点にある。だからその嘘は、敵よりも嘘をつくもの自身を騙すものでなければならず、自分たち自身を騙すことに成功すればするほど、その嘘は効果を発揮することになる。「言いかえると、嘘を語るものが成功すればするほど、それだけ彼は自分自身の作り話の犠牲になるように思われる。(略) **C** に見、真実に似たものが作り出されるのである」。

比喩を用いて言えば、伝統的な嘘は「いわば事実性という織地に穴を開ける」ようなものであるのに対して、現代的な嘘は「事実の織物全体の完全な編み直し」とでも言うべきものである。伝統的な嘘が真実を隠蔽するのに対して、現代的な嘘は真実というカテゴリーそのものを破壊し、それを通じてわれわれの「世界」それ自体を破壊しようとする。現実の世界を否定し、それに代わる虚構、あるいは「別のリアリティ」を作り出し、そのイメージのうちに住まおうとするところに現代的な「嘘つき」の特徴があ

る。「外敵に向けられた嘘と異なつて、自国民に向けられたイメージは、すべての人にとって、とりわけそのイメージを制作した人たちが自身にとつて一つのリアリティになりうる」。そして、「以前の時代には知られていなかったような、すべてにわたりに返しのつかなくなる可能性こそ、現代の事実操作から生じてくる危険である」。

こうした状況は、もはやジョージ・オーウェルの小説「一九八四年」\*に出てくる「真理省」をわれわれに想起させるものである。一九八四年の世界では、真理省がその時々々の状況にあわせて過去と現実を絶えず書き換えていくのである。そのような世界では、現実に行き起きていることが事実として書き留められるのではなく、むしろ記録に書き留められたことが事実となり、その記録にあわせて現実のほうが書き換えられるのである。

党は、オセアニアは過去一度としてユーラシアと同盟を結んでいないと言っている。しかし彼、ウィンストン・スミスは知っている。オセアニアはわずか四年前にはユーラシアと同盟関係にあったのだ。だが、その知識はどこに存在するのだろうか。彼の意識のなかにだけ存在するのであつて、それもじきに抹消されてしまふに違いない。そして他の誰もが党の押し付ける嘘を受け入れることになれば——すべての記録が同じ作り話を知ることになれば——すべての嘘は歴史へと移行し、眞実になつてしまふ（「一九八四年」）。

一九四九年に書かれたこのディストピア小説を笑いとばすことができないような状況に、われわれの時代は陥りつつあるのではないか。そこでは、われわれがこれまで共有してきた常識<sup>3</sup> 共通感覚（コモンセンス）が破壊され、われわれの共有する「世界」が破壊されていくことになる。

「徹底的に嘘を語ることは、比喩的にいえば、われわれの足元から地面を取り去つておきながら、われわれが立つことのできる別の地面を提供しない」<sup>4</sup> ようなものだと言ふ。そして、「われわれの方向感覚やリアリティの感覚にとつてその支えとなる何もかもが揺れ動く経験は、全体主義の支配下の人間に最も一般的で最も生々しい経験の一つである」。つまり、歴史

修正主義者のように、現実の世界を否定し、それとは異なる偽のリアリティを持ち出してきて、そのうちに閉じこもる現象は、間違いなく全体主義のチヨウコウである、ということになるだろう。

『全体主義の起源』のなかでアーレントは、全体主義の特徴をテロルによってイデオロギーを無理やりに実現していく政治体制であると定義づけている。すなわち、「全体主義的独裁は一切の事実を無視し、すべての嘘を現実に変化し、あらゆる予言を的中させることができる」のであり、それを支えるのは「現実から想像へと逃避し、事実から目を背けて歴史の必然性を信じようとする」メンタリティである。「事実<sup>5</sup>というものは大衆を説得する力を失ってしまったから、偽りの事実ですら彼らには何の印象も与えない。大衆を動かす得るのは、彼らを包み込んでくれると約束する、勝手にこしらえあげた統一的体系の首尾一貫性だけである」。

アーレントが言うところの「大衆」は、複雑性や偶然性をはらむ現実よりも、首尾一貫した虚構を愛する。言いかえれば、アトム化した大衆は、現実の複雑性や偶然性、流動性に耐えられず、その代わりに首尾一貫した虚構を欲するのである。それは現代の大衆が現実の世界に対する信頼を喪失し、〈故郷喪失〉および〈世界疎外〉の状態に陥っていることを意味している。その状態に耐えきれない大衆が、首尾一貫した虚構を求めて、全体主義的世界へと逃避するのである。

「大衆がひたすら現実を逃れ、矛盾のない虚構の世界を憑かれたように求めるのは、アナキックな偶然が壊滅的な破局の形で支配するようになったこの世界にいたたまれなくなった彼らの故郷喪失のゆえである」。「その結果、現実から完全に切り離された被告にとっては、でっちあげの筋書きそれ自体のもつ内的論理、その首尾一貫性以外にもはや何ものも現実とは思えなくなってしまう」。

さて、以上のようにアーレントは「現代的な嘘」のうちに全体主義的チヨウコウを見出してこれを批判しつつも、「政治における嘘」はそれとは正反対の意義を持ちうることもありうることを論じている。すなわち、「政治における嘘」は彼女が称賛した「活動」と深い結びつきを持っているというのである。「嘘をつく能力」と「活動する能力」は相互に関連し、両者はともに

「D」という源泉で通じ合っている。そして、「政治における嘘」はときに新たな「始まり」をもたらすことにも繋がりがうるので、と。

これは一体どういうことなのか。アーレントらしいスキャンダラスな問題提起であるが、その理路はおおよそ以下のようなものである。嘘を語るというのは、世界が今あるのとは違うあり方について語るということ、そして「世界が現実にならぬ」とは別様にあるのを欲する「こと」である。このような「別の世界」を想像することによって、この世界に新たな「始まり」をもたらす「活動」への道が拓かれる。この世界に新たな「始まり」をもたらすというのは、今ここにある世界（現実）を別の姿に変えるということであるから、そのための想像力を持つことと、嘘をつくこと（あえて真実、真理とは別のことを語ること）は紙一重の関係にあり、ときに重なり合っている。

われわれには世界を変え、そのなかで何か新しいことを始める自由がある。<sup>6</sup>存在を否定したり肯定したりする精神的な自由、「イエス」と「ノー」をいう精神的自由（略）がなければ、どんな活動もできないだろう。そして、言うまでもなく、活動こそが政治を形づくるのである。（「政治における嘘」）

活動者は、世界が今あるのとは別様であることを欲し、それに対する想像力を持つ。そして、それを言葉にして他者に伝え、それを実践に移す力を持つている。それによって、全く予想されていなかったような出来事を引き起こし、この世界に新たな「始まり」をもたらすのが「活動」政治の意義である。「すでに起こったことに対しては期待できないような何か新しいことが起こるといのが「始まり」の本性」であり、このような「始まり」をもたらすためには、今あるのとは別の世界を想像する力＝嘘をつく力が必要になる、というのがアーレントの考えであった。

しかしそうであるとすれば、この「別の世界」のあり方を想像し、それを語る「活動としての嘘」と、現実を否定して居心地の良い偽物の世界を作り上げる「現代的な嘘」は何が異なるのか、という疑問が出てくる。アーレントの議論によれば、アドルフ・ヒトラーでさえも「活動の人」である、ということになってしまうのではないか？ 彼らは少なくともその時にあったのとは別の世

界のあり方を欲し、その想像力を言葉にして伝え、新たな「始まり」をこの世界にもたらそうとしたのだから。

この問題についてアーレントは明確に論じているわけではないが、彼女が「真理と政治」論文の最後に、「嘘」と正反対の「真理」について語っていることがそのヒントになるだろう。すなわち、「真理はそれ自身の力を持っている。つまり、権力を掌握しようとする者がたとえいかなる工夫を凝らそうとも、真理の代替物となるものを発見したり考案したりすることはできない。なるほど、説得や暴力は真理を破壊しうるが、真理に取って代わることはできない」。

アーレントは、「真理」の領域と「政治」の領域を明確に区別する。しかしここでアーレントは、「真理」が「政治」にとって無意味だと語っているわけではない、すなわち、「政治の領域は人間が意のままに変えることのできない事柄によって制限されている」。その制限こそが「真理」である。「比喩的には、真理はわれわれが立つ大地であり、われわれの上に広がる天空である」。別言すれば、真理は政治を条件付ける役割を持っている。「真理」という枠組みに制限されながら、人は「活動」政治を行うのであって、「真理」を全く無視した「活動」政治などというものはあり得ない。あるいはそのような「活動」政治は、われわれの世界を破壊し、危機に陥れるものである。現代のポピュリスト（扇動者）たちが行っているのは、まさにそのような偽物の「活動」政治である。

現在とは別様の世界のあり方を志向する本物の「活動」政治は、あくまで政治の外にある「真理」によって制限を受け、条件付けられながら、その「始まり」を目指すのだ。そしてこの「政治」の外側にある「真理」の領域を担うのが、学問と司法の役割であるとアーレントは指摘する。あるいはここにジャーナリズムを付け加えても良いだろう。学問と司法こそが「真理」の領域を担い、それに反する「政治」活動を批判する。この「真理と政治」の緊張関係のうちにこそ、始めて本物の「活動」が可能となるのだ。

われわれが自由に活動し、変えうるこの政治の領域が損なわれずに、その自律性を維持し、約束を果たすことができるのは、もっぱら政治自身の境界を尊重することによる。概念的には、われわれが変えることのできぬものを真理と呼ぶことができる。（「真理と政治」）

われわれは、われわれの世界を破壊しようとする者の嘘(全体主義的な嘘)と、世界に始まりをもたらそうとする者の嘘(活動的な嘘)とを、慎重に見極めねばならない。

(百木漠「アーレント」政治における嘘」論から考える公文書問題」による)

(注)

\*アーレント＝ハンナ・アーレント(一九〇六年～一九七五年)。ナチス政権が成立するなかでユダヤ人として追いつめられ、ドイツから脱出した女性の政治哲学者。フランスを経由してアメリカ合衆国に亡命し、そこで『全体主義の起源』人間の条件』を始めとする活発な著作活動を行って、現代の政治思想に大きな影響をもたらした。

\*『一九八四年』はイギリスの作家、ジョージ・オーウェルによる近未来小説。一九四九年刊行。文中のウィンストン・スミスはその主人公。この作品における『一九八四年』の世界はオセアニア、ユーラシア、イースタンの超大国によって分割されている。舞台となるオセアニアでは思想、言語、日常に対する統制が加えられ、市民生活のほぼ全般が監視されている。

問一 傍線部1「フゴウ」を漢字にする場合に最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **10**。

① 符号                      ② 符合                      ③ 附合                      ④ 負号                      ⑤ 譜合

問二 空欄 **A** に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **11**。

① 徳                              ② 悪                              ③ 道具                              ④ 才                              ⑤ 嘘

問三 空欄 **B** に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **12**。

① 試みる                      ② 告げる                      ③ 曲げる                      ④ 訴える                      ⑤ 鳴らす

問四 空欄

C

に入る語句として最適なものゝ次の①～⑤から選ぴ、記号をマークせよ。解答欄番号は

13

。

- ① 自らも欺かれてゐる場合
- ② 自分だけは眞実を知つてゐる場合
- ③ 巧みな嘘をつく場合
- ④ 敵を欺くことに成功した場合
- ⑤ 嘘の規模が大きい場合

問五 傍線部2「とりわけそのイメージを制作した人たち自身にとって一つのリアリティになりうる」の説明として最適なものゝ

次の①～⑤から選ぴ、記号をマークせよ。解答欄番号は

14

。

- ① 嘘をつく者は現実の世界よりも彼らの作りあげた嘘の世界の方が優れてゐると感じる。
- ② 自分たちにとって心地よいイメージであれば、それが現実でなくてもかまわない。
- ③ 自分たち自身に嘘をつく者は、それに反する現実を破壊しながら、自らの嘘に騙されようとする。
- ④ 政治に夢が必要である以上、虚構を信じ通すことでそれが現実になることがあり得る。
- ⑤ 外敵に対して嘘をつくのは簡単だが、自国民に対する嘘をつく者は、より醒めた理性が必要である。

問六 傍線部3「われわれがこれまで共有してきた常識⇨共通感覚(コモンセンス)が破壊され、われわれの共有する「世界」が破壊されていくことになる」の説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **15**。

① 自分が知った事実を他人と共有し確認しあうことができなくなり、自分の見ている世界の現実性に自信を持つことができなくなる。

② 常識をものともしないような人の割合が限度を超えて増えていった時、ついには安定した日常生活そのものが脅かされるようになる。

③ ある世代にとつて常識だったことが別の世代にとつてはそうではないことがあり、そこから世界の分断状況が広がっていくことになる。

④ それまでの自分の常識がもはや通用しないと感じられたときに、人は居場所のない思いを抱いて社会に背を向けるようになる。

⑤ 常識とは個々人が見たり聞いたりするものを共有できるところに成立しているのだから、情報の細分化は常識にとって脅威である。

問七 傍線部4「チヨウコウ」を漢字にする場合に最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **16**。

① 兆候

② 聴講

③ 調向

④ 徴向

⑤ 調候



問八 傍線部5「事実というものは大衆を説得する力を失ってしまった」の説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **17**。

- ① 大衆にとって日々の現実には、居心地悪く、生きづらいものとなっている。
- ② 小説や映画のような物語に魅せられた大衆は事実に関心を持たなくなった。
- ③ 現実があまりに複雑で、偶然と無秩序に満ちているため、大衆はそれに堪えられなくなった。
- ④ 大衆はどんな事実にも裏があることに気づいてしまった。
- ⑤ 大衆は事実を語る政治家よりも際立った性格の持ち主の言葉に耳を貸す。

問九 空欄 **D** に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **18**。

- ① 権力性
- ② 想像力
- ③ 破壊力
- ④ 不満足
- ⑤ 積極性

問十 傍線部6「存在」の説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **19**。

- ① 居心地の良い虚構
- ② 今ここにある現実の世界
- ③ この社会に生きる人間
- ④ 存在論哲学の理念
- ⑤ 別様の世界のあり方

問十一 傍線部7「政治自身の境界」の説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 20。

- ① よりよき世界を想像しそれを実践する政治と全体主義の政治とを政治の内部で区別する線
- ② 政治が政治の力で変えられることの少なさを自覚し、謙虚な姿勢で自制すべき一線
- ③ これまでの歴史の流れによって規定された政治の可能性の範囲
- ④ 意のままに変えることのできない真理を認めたくえて、政治にできることの領域が確定される線
- ⑤ 政治において嘘が許される場合とそうでない場合とを区別する境界

三 次の文は、農業技術史、食の思想史を研究してきた筆者が農業と戦争との関わりについて論じた本の一節であり、前段ではトラクターや化学肥料などがいかに農業のあり方を変えていったかを論じている。読んで、後の問に答えよ。

これまで述べてきた通り、第一次世界大戦は、馬も人間も、ぬかるみにはまりながら、ちぎれたり、腐<sup>1</sup>ハイしたりして死んでいった、とても悲惨な戦争でした。それでも二十歳前後の若い兵士たちは、強力な武器によって肉体を木っ端<sup>2</sup>ミ塵に吹き飛ばされることを覚悟しながらも、戦うしかありません。しかし、それは怖いことです。機関銃が放つ銃弾の量は尋常ではありませんが、砲弾も降ってくるし、地雷もありましたし、一九一五年四月からは毒ガスも漂ってきます。そのうえ、たくさんの有刺鉄線が張り巡らされていますから、もう穴を掘って塹壕<sup>3</sup>に潜らざるをえません。そうした塹壕が、スイス国境から英仏海峡まで八〇〇キロメートルも連なる事態となりました。こうして、戦線が膠着<sup>4</sup>状態に陥ってしまいます。

そんな状況のなかであるときイギリスとフランスの軍人や軍需産業が、のちに「キャタピラー(芋虫)」という商標がつけられる履帯<sup>5</sup>のついたアメリカ製トラクターを見て、これを使えば、前方を突破できるのではないかと思いついたのです。キャタピラーはトラクター開発当初から、各社によって開発されていたのでした。そしてそのアイデアが具体的に動き出した結果、開発されたのが戦車でした。

民生技術を軍事技術に転用することを「スピンオン」と言いますが、トラクターがスピンオンされて戦車に変身したわけです。  
\* 内燃機関があつて、キャタピラーがあつて、平らでない土地、すなわち不整地に強いのがトラクター。その開発技術は軍事技術としてこれ以上ないほど適したものでした。トラクターは A 「戦車の母」なのです。

第二次世界大戦では、戦車は大きな役割を果たします。連合国も枢軸国も、各国がさまざまな戦車を開発するようになりました。平時のトラクター工場は、戦争が泥沼化するなかで、つきつぎに戦車工場になりました。

化学肥料の誕生もまた、戦争を大きく変えます。

化学肥料が、空中の窒素を固定してアンモニアを作ることで実現したのは、<sup>\*</sup>すでに述べた通りです。ここで合成されたアンモ

ニアは化学肥料を生産するうえで必須であるだけではありませんでした。実は火薬の生産にも必要です。これもスピノンですね。火薬の原料として硝酸が重要ですが、これはアンモニアから生成することができます。そこで、化学肥料の生産過程で作るアンモニアを火薬産業に利用しようという発想が生まれます。つまり、化学肥料産業が火薬産業にもなっていたのです。第一次大戦中、化学者のカール・ボッシュは、ドイツ政府から請われて、火薬の原料となる硝酸を生産する工場を稼働させました。

日本でも、化学肥料で成長した日本窒素肥料も昭和電工もともに、火薬を大量に製造しました。日本窒素肥料は、その拠点として現在の朝鮮民主主義人民共和国の咸興市へんくうに朝鮮窒素肥料を創業しました。あわせて、朝鮮で山を削り、膨大な水を落として電気を生産する水力発電所を建設しました。その電気ですべて化学肥料と火薬を大量生産して大陸進出に必要な資材を供給したわけです。水俣からも多くの人が朝鮮半島に渡っています。水俣の歴史は化学肥料製造の歴史であり、火薬製造の歴史でもあるのです。その延長上に水俣病があることを知らなければなりません。

そして、空気中の窒素を利用して火薬の原料が大量に作られるようになったことで、第一次世界大戦時の戦場では、機関銃がさらに多く使われるようになっていきます。一度に大量の弾丸を使って連射できるようになったためです。

ジョン・エリスという歴史研究者が執筆した『機関銃の社会史』というユニークな本があります。この武器は、アメリカ南北戦争で使用されて以来、日露戦争で華々しい成果を上げ、アフリカの植民地での住民たちの叛乱鎮圧に使われたあと、ヨーロッパにも投入されます。エリスは、こんなことを書いています。機関銃は「難解な戦術論を考える必要もないし、射程の違いを概算する必要もない」武器だ、と。機関銃の特性は、手当たり次第に撃てることです。

これはそれまでになかったことでした。狙撃の銃、つまりライフルだったら相手を確認して撃ちます。しかし、機関銃というのは英語でマシンガン、機械的に撃ち続ける道具。

A

「抽象」に向かって撃つわけです。

B

確認する必要はほ

とんどありません。撃つたら敵兵が何人かなぎ倒されていく。こういう殺傷の方法を得たことが、経済封鎖とともにわたしたちの人を殺害する感覚を大きく変え、二十世紀以降の戦争の性質自体を変えていったのではないのでしょうか。この感覚は、絨毯爆撃、原爆、ヴェトナム戦争で枯葉剤を空から撒く作戦を経て、無人機による殺戮に至るまで、わたしたちの歴史の地下をドブ

川のように流れていると言えます。しかも、この感覚は、力のない側ではなく、力を圧倒的にもつ側にこそ宿ります。枯葉剤もモンサントが作った農薬でした。

二〇〇七年、イラクでアメリカ軍のヘリコプターがイラクの民間人を機関銃で殺害している映像記録が流出しました。このヘリコプターは、「AH-64アパッチ」と呼ばれる戦闘型ヘリコプターで、湾岸戦争で実戦投入されたものです。一機六〇億から七〇億円くらい。いまはボーイング社が生産しています。わたしはこの映像に戦慄を覚えました。ある兵士が、襲撃された怪我人を運んでいる民間人を見つけ、「怪我人を運んでいるぞ」と言うと、別の兵士が「でもやらせてくれよ」と応答して、銃撃後、「車ごと木っ端ミ塵だ、ハハハ」と笑っていたのです。明らかに民間人と確認できる人間たちに向かつて空中から乱射することが、これほどまでに安易なことに心底驚いたのでした。

人を殺すことは肯定できることはありません。しかし、本当に憎い人間を殺さなくてはならないと思うとき、その人を殺すと決めて、返り血を浴びて相手の生命を絶つというのであれば、相当の決意と心理的葛藤がそこにはあり、ある種の罪の重さが一生殺人者の心を縛るはずで、自分**C**がはつきり残る。

しかし米軍ヘリの機関銃の掃射はそうではありません。人の命を奪ったという感覚をもたないまま、民間人を殺したあと愉快に笑うことさえできる。人を殺したかどうかを明確に意識することなく、簡単に人が殺せる。こうして二十世紀の戦争がほとんど歯止めのない利かない悲惨なものへと変貌していったのだとわたしは考えています。

言うまでもなく、農業は、人間が生きていくためのかけがえのない産業です。そのために発達させてきたはずの技術が、しかし、実は人間を大量に殺す技術の基盤と重複している。トラクターの生産技術は戦車に、化学肥料の生産技術は火薬に、毒ガスの生産技術は農薬に転用されました。そのことは使用者である農業従事者たちも意識していない。責任者がすぐに浮ばない仕組みです。

これを「デュアルユース」と呼んでいます。民生技術と軍事技術の二重使用ですね。天文学者の池内了さんの『科学者と戦争』に

はこの問題が整理して書かれています。わたしは大学院の修士論文でトラクターと戦車、化学肥料と火薬のデュアルユースの問題を扱って以来、ずっと暮らしの仕組みと人間の感覚の問題として考えてきました。携帯電話も、インターネットも、電子レンジも、カーナビも、みんな軍事技術からのスピノフですから、わたしたちの暮らしはもはやこの仕組みから逃れようがないのです。しかも、この仕組みは、わたしたちは普段意識しなくても生きていけますから、それほど罪悪感が生じません。別にいいじゃないか、と言う人も多いでしょう。

わたしも、トラクターや化学肥料や農薬は戦争にも応用されるから使うべきではない、というような議論にはあまり意味がないと思っています。だからと言って、どんなにあがいても戦争をしようとする人間がいるかぎり兵器はなくならないし、戦争なんて永遠に続くものだ、という物分かりのいい「現実主義者」の言い分には抵抗せねばなりません。二つの顔を持つ技術の世界に抗<sup>あが</sup>う方法を考えなくてはなりません、ここではまず、現実の厳しさを見つめ、仕組みの性質を知ることにはしましょう。

わたしはこの問題を、これらの技術の性質から考えてみたいと思います。トラクターと戦車、化学肥料と火薬、農薬と毒ガス、原子力発電と核兵器。戦時利用であれ、平和利用であれ、どちらも、似た性質をもっています。どれもが、扱う対象に対して距離をとって、人間が長年培ってきた勘やそれに基づく即興的な対応力ではなく、マニュアルに依存して用いる道具です。トラクターに乗っていると、土壌中の湿気と微生物たちの活動に注意を払いにくくなるように、戦車のなかに閉じこもっているかぎり、戦場で腐<sup>く</sup>した死者の臭いを嗅がなくてもすみます。農薬を大量に撒くことで死んでいく虫がどんな虫か、場合によっては益虫かもしれないことを考えなくてもいい。遠距離からガスを詰めた砲弾を発射すれば、毒ガスによって爛<sup>た</sup>れた皮膚を見なくてもいい。原爆後の長崎で死んだ子どもを抱くお母さんの虚ろな顔を見なくてもいい。農薬によって畑の周囲の昆虫が激減し生態系が変わることも、農業用水や地下水が汚染されることも、人々の健康が著しく害されることも、特段気にする必要はありません。とりわけ化学肥料やそれが含まれる養液を用いる植物工場では、菌がつかないように厳重に衛生管理されていますから、病気になるレタスを見なくてもすみます。



問三 傍線部3「しかし、それは怖いことです」とあるが、怖いことであるために戦場での闘い方はどう変わっていったか。最適なもの<sup>な</sup>ものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **23**。

- ① 銃弾の量を増やしていった。
- ② 毒ガスを使用するようになった。
- ③ 穴を掘って塹壕に潜るようになった。
- ④ トラクターを使用するようになった。
- ⑤ 戦車を開発するようになった。

問四 傍線部4「<sup>にか</sup>膠着状態」はここではどのような事態を意味するか。最適なもの<sup>な</sup>ものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解

答欄番号は **24**。

- ① 膠<sup>にか</sup>のようにくっついて離れなくなった状態
- ② ねばねばと粘りついて動きにくくなった状態
- ③ ある状態が固定してほとんど動かなくなった状態
- ④ ある物がどこまでも長くのびていく状態
- ⑤ 柔軟性を失って破壊されやすくなった状態



問五 空欄 A が二か所ある。これに入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番

号は 25。

- ① いわば                      ② にもかかわらず                      ③ くわえて                      ④ あるいは                      ⑤ いわゆる

問六 空欄 B に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 26。

- ① 自分がどれだけの銃弾を打ち、その内のどれだけが無駄玉なのか  
② そこにどんな人間がいるのか、自分が殺そうとしている相手が誰なのか  
③ 機械が自動的に戦術を考えてくれるのだから、人間がその成否を  
④ 戦闘行為の速度が格段に上がって、いつ終わるともしれない戦争の行方を  
⑤ 兵士が機械の扱いに習熟しているか、適切に扱い得ているか

問七 傍線部5「わたしたちの人を殺害する感覚を大きく変え、二十世紀以降の戦争の性質自体を変えていったのではないでしようか」について、どのように変わっていったと考えられるか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。

解答欄番号は 27。

① 人体をバラバラに破壊する破壊力の大きな武器が使われるようになり、人々は無残な死体に脅威を感じるようになっていった。

② 戦場の悲惨だけでなく、経済封鎖によって国民が飢えに苦しむことによって、敵への憎しみがこれまでにないほど強くなっていた。

③ 戦争の勝敗が最新の強力な武器を持っているかどうかにかかってきたため、戦争をする前に国の経済力が結果を決めるようになった。

④ 戦場で銃を撃つたり手りゅう弾を投げたりすることだけが戦争ではなく、銃後の工場で女性や子どもたちが砲弾や毒ガスをすることも重要な戦争の一部となった。

⑤ 狙った先にどういう人がいて、どういう苦しみの中で死んでいくのかを知らずにすむようになり、人を殺すという感覚のないまま大量殺害が可能になっていった。

問八

空欄 C に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 28。

① 誰の力も借りずに相手に勝ったという感覚

② 誰かに復讐を遂げたという感覚

③ この手で人をあやめたという感覚

④ とりかえしのつかないことをしたという感覚

⑤ 生涯罪をつぐなわねばならないという感覚

問九 次の各文について、本文の内容に合っているものには①を、そうでないものには②を、それぞれマークせよ。

・ 技術の進展によって労働の苦痛が軽減され、特別の技能をもたない人や力の弱い人にも働く機会が与えられるようになる。 解答欄番号は **29**。

・ トラクターを始めとする農業の技術が身体を酷使する農業労働の苦痛から人間を解放したが、同様に戦車もまた戦場における生命の危険と苦痛を軽減する。 解答欄番号は **30**。

・ 農業技術の導入によって人が土から遠ざかったように、戦争の技術によって自分が殺そうとしている人の苦しみ、悲しみを目の前に見る必要がなくなったが、同時にそれが深刻な感覚の鈍麻をもたらすことになる。 解答欄番号は **31**。

・ さまざまな技術が私たちの日常を便利で快適なものに変えていったが、その分だけ人間の生が退屈で味気ないものに変わっていく。 解答欄番号は **32**。

・ 現代の戦争はもはやかつてのように大量の犠牲者を出す悲惨なものではなくなったため、逆に戦争を止めようとする意識が薄らいでいく。 解答欄番号は **33**。

・ 対象から距離をとる技術が導入されたことで、その姿を具体的に思い描く必要がなくなった結果、人間の負うべき責任感が薄らいでいく。 解答欄番号は **34**。

・ 自分が殺そうとしている敵の姿が抽象的なものとなり、その結果、社会全体が自国の運命を左右する戦争に対してさえ積極的にならうとしなくなった。 解答欄番号は **35**。

